

たかが川柳 されど川柳 (十八)

上野 一彦

川柳の作法について―師匠の教え―

私の川柳の細道には二人の師匠がいる。

ひとかたは川柳同人「ばらばら」の大先輩岡部達昭さんで大師匠。もうひとかたは私を川柳の道へ引きずりこんだ盟友にしてライバルの岡部晃彦さん、小師匠である。

『ばらばら』はこの道では知られたNHK学園に川柳講座を創設された、かの大木俊秀先生を発祥とし、「だんだん」を経て、この度晃彦さんが代表となり「ばらばらⅡ」として、その由緒ある名を復興した。

その煽りというか玉突き的に、「多年草」の代表を晃彦さんから私が引き継いだ次第である。

まあ「ばらばら」が、私にとっては野球のメジャーリーグなら「多年草」はマイナーリーグといったところ、マイナーからメジャーに移った人もいれば、私のように、まだ両方を掛け持ちしているメンバーもいる。ところで「ばらばら」の重鎮、達昭さんが最近、川柳随筆を「ばらばらⅡ」に連載しているが実に味わい深く、多年草の新人には是非紹介したく、氏の了承を得たのでその一部をここに紹介したい。

達昭大師匠曰く、『ばらばらの創始者大木俊秀さんの川柳作法を紹介しよう。それは①分かること、②中七下五の厳守、③手垢がついていないことの三つだ』という。俊秀

さんは大師匠・小師匠の師だが、残念ながら私はお名前とご本でしか知らない。

【達昭師匠の教え】

①分かること

『川柳の基本に「一読明快」という言葉があります。一読して何を言いたいか明快に分かることを良しとします。この句はこういうことを言いたかったのだ、という説明を後で聞くぐらいナンセンスなことはありません。難しい漢語やIT語、一部にしか分からない専門語などを得意げにあるいは不用意に使っている句が結構あります。独りよがりな抽象句も感心しません。

- ・アマリス不意に抱かれて鳥声
- ・約束が僕を静かな滝にする
- ・塊になって戸棚の奥にいる

こうした句は、短詩系文学としては評価されるのですが、川柳とは言い難いのです。川柳は長く庶民の文芸として続いてきました。一読明快はやはり命なのです。』

最初に作った句は捨てなさいという教えもある。独りよがりて意味の伝わりにくい句も時々目にする。時間をおいて読み直してみると表現をちよつと変えただけでぐつと理解が深まる好句になることもよくある。一方、ただ、わかりやすさだけを追求し過ぎると凡庸な句になってしまうこ

ともあるからその加減が難しい。

②中七下五の厳守

『中七下五の厳守については、俊秀さんは大変厳しい師でした。日本語には、古来七五調というリズムがあります。このリズムは、日本人の体に染みついたリズムなのです。このリズムを崩すと、日本語は座りの悪い落ち着かない言葉になります。俊秀さんは、「中七下五は何としても守りなさい。どうしても十七文字に収まらない時は、上五を崩してまとめなさい」と指導されました。上六、上七、ときに上八も認めても、中七下五は厳守でした。』

- ・歴史書として読んでいた「カムイ伝」
- ・「火の鳥」に輪廻を学んだ若き日

句想は似ている。最初詠んだ時、後者の句に惹かれたが、中八下四の句跨ぎがどうもしっくりこず、結局、前者に軍配をあげた。

- ・「火の鳥」に輪廻学んだ若き日々

ともう一努力してあれば間違いなくこちらを選んだ。ところで俳句と川柳は「似て非なるもの」というひともいないわけではないが、どちらも「俳諧」という一種の連歌から派生しているため、そのルーツは同じで五七五で

あり、似たところも多い。夏井先生が俳句に挑戦する芸能人を手厳しく指導するTVの人気番組「プレバト」も、句から作者の句想がイメージ豊かに伝わるかなど、川柳に通じる話が結構あつて参考になる。

初心者から特待生、名人と上手になるにつれ、あまり知られていない俳句固有の季語をこれ見よがしに使ったり、句形を敢えて崩した破調句が目立つ。五七五に拘らない自由律俳句の大家、尾崎放哉や種田山頭火にあらざるばひとあらずといった体である。

- ・ 咳をしても一人(放哉)
- ・ 分け入っても分け入っても青い山(山頭火)

- ・ 雨はれてげんげ咲く野の夕日かな(放哉)
- ・ 焼き捨てて日記の灰のこれだけか(山頭火)

といった優れた定型句もたくさんある。若い頃、しっかりとしたデッサンを描いていたピカソを見るようでもある。基本は基本である。

③手垢がついていないこと

『わずか十七文字の中に思いを詠みこむ川柳には、同想句が表れる可能性は十分にあります。私にも、同想どころか文言まで全く同じ句が、番傘誌上に載ったことがあります。もう四十年近く前のことです。「くたびれた男に妻の

それに独創性や新しさがあり、さらに诗情豊かな表現力を持つていなければなりません。もう一つ、「時と状況」にマッチしているかというタイムリー性があれば鬼に金棒でしょう。』ということになる。

キャリアが多少長くなると決して川柳を作る苦労話などを題材にはしなくなる。そうした句は、誰しも一度は作るからにちがいない。いわゆる舞台裏の仲間内の「楽屋落ち句」として、やはり手垢を感じる。ただし先般、こうした大先輩の句を目にした。

- ・ AIの助けで一句内緒です(村田 昭)

将棋や囲碁の世界では若者のAI研究が盛んで有り、ついには川柳や俳句の世界までという句想であれば新鮮である。まあ、何でもありとしておいた方が現代川柳の流儀にかなっているようでもある。師匠は師匠、ありがたい存在である。ただか一〇年一五年程度の新参者であれば、素直な熱意と向上心こそが上達の一里塚というわけである。

たかが川柳 されど川柳 (二〇二一年下半年)

(川柳同人「ばらばらⅡ」「多年草」等に発表した拙句を短評付きで載せています。本年九月より、両川柳同人とも毎月発行となりました。)

火吹き竹」という句でした。火吹き竹がまだ使われていた頃です。相手は新潟の全く接点のない人です。状況からみてお互いに盗作する可能性はゼロでした。偶然にしても、自分の発想力の凡庸さに少々白けた気分でした。

「火吹き竹」からの発想は、特に手垢がついていたとは思いませんが、時事川柳などには、同じ視点、同じ発想の句がいくつも出てきそうです。』

この反省はキャリアの浅い方の句を見ているとよく感じる。季節の行事に因んだ句 毎年嫌というほど作るし、目にもする。それだけにそこを乗り越える必要がある。政局がらみ、事件がらみも「時局句・ニュース句」がどうしても多くなる。また、メンバーによつてはシルバー川柳花盛りということにもなる。若い方が入会するとそれだけで新鮮な切り口に惹かれる。

男性メンバーのなかに女性加わる時にも同じことが起きる。孫ができる「孫句」、猫好きの「猫句」、髪が薄くなると「ハゲ句」、太ると「肥満句」もやたらある。どうしても、作者がすぐにバレてしまうものにもなるし、それが手垢ともなる。

晃彦小師匠曰く、『川柳で高い評価を得るには、分りやすく共感性のある句、さらに「穿ち・軽み・滑稽」などの川柳味(実は、七味くらいの味がありそう)があつて、

七月

ばらばらⅡ 十三号

点滴を見つめ詠みつつ君は逝く

◇本年の一月号の「点滴につながいわし雲が好き」は太田ヒロ子さんが「ばらばらⅡ」に寄せられた最期の句でした。病床で詠まれた句であったことを知ったのはだいぶ後であり、そうした感慨を込めて詠んだ句であった。

閉店の知らせに滲む涙文字

◇町から個人商店がどんどん消えていく。久しぶりに立ち寄ってみると閉店の知らせが張つてある。

陽だまりに母の歌声耳の奥

◇男にとつて母親は特別な存在。好きになるひとにもどこかそうした面影を求めてしまう。マザコンと言ってくれるな。

題詠「暇」

金と暇できた頃には気力失せ

◇若い時には遊ぶ金がない。金が多少自由になると今度は暇がない。やつと金も暇もできた頃には気力が失せる。

友と暇ころ掛けなきやできません

◇人生で大切な友達と暇、どちらも意識しこころがけないとなかなかできません。

暇ですか聞かれりや意地でバタバタと

◇暇ですかと聞かれたら、急に何やら忙しいふりをすのは意地より見栄でしょうか。

多年草 一四三号

ありがたや接種予約に大家族

◇ワクチン予約券は届いたが実際の予約が難しい。家族総出で、電話、PC、スマホとアプローチするも繋がらず、予約が取れるとそれが美談としてNEWSになるなどお国柄です。

民よりも先にワクチンお・も・て・な・し

◇コロナ下、オリンピック強行、国民に行き渡らないワクチンも外国選手に優先接種、これもお・も・て・な・し。

国民の命と五輪平行棒

◇オリンピック強行、平行棒比喻してみました。

題詠「色」

色づきし初々しきは朝の露

◇乙女のはかない美しさはまるで朝露にも似て・・・

俺色に染まらぬ妻に匙を投げ

◇年々その力関係は変化し、俺色に染まるどころか、もはや諦めるしかありません。

絵の具箱薔薇色だけが見つからぬ

◇この季節、明るいバラ色の明日を描く絵の具がみつかり

しまう。

砂の上IFを積み上げ夢をみる

◇砂上の楼閣という言葉があるがIFと言う仮定をさんざん積み上げるのも楽しそう。

九月

ばらばらⅡ 一四号（月刊化記念号）

無造作に時が指からこぼれゆく

◇手の上に載せ砂が指の間からこぼれ落ちるように歳をとると時間が時の流れがやたらと速くなる。

スマホにも置いてきぼりを食らいます

◇携帯もガラ型からスマホへと進化。なんと毎年バージョンアップ。なんとかついていてはいるものこつちはそのたびアップアップ。

何気なく話せる友も今は墓

◇何気なく会ったり、話したりしていた友がいなくなるとその寂しさはこの上ない。今更のように懐かしく思い出す。

題詠「無理」

路上飲み 若けりや俺もやっていた

◇コロナ下に若者たちは無造作に路上飲み。眉をひそめるが実は若けりや自分だってやっていたかもしれない。

省力化無理ムラ無駄がモザイクに

ません。

八月

多年草 一四四号

ワクチンに全てを賭けた大博打

◇国民の信を得るため、ひたすらワクチンの効果と準備を語りますがなかなか実感しません。

どの色のメダル獲るにもドラマあり

◇金メダルしかほしくないと豪語する選手もいれば、素直に銅メダルでも喜ぶ選手もいる。競技と歴史によって受け取り方は違うにしても、どのメダルの影にもドラマがありそうです。

読み飛ばし民の心も読み外す

◇お疲れのせい、官僚の作ったあたりきたりの原稿しか読まないせいか、それさえも読み飛ばすお粗末なスピーチの首相。結局、国民の心を読み違えてしまう。

題詠「仮定」

危機管理洞察力が道分ける

◇危機管理とは最悪の事態を想定できるかどうかといわれる。想定外だったは言い訳にならない。

明日のこと分らないまま明日が来る

◇不透明な今日この頃。何もわからないままに明日が来て

◇日常的に省力化を心がける。そのためにはムリ・ムラ・ムダの「三ム」に気をつける。これぞ老人の知恵なり。

無理承知 貴族の世界運動会

◇クーベルタン男爵が生きていたら今のオリンピックをどう見るだろう。コロナの下で子ども達の運動会だって中止だというのに。

特別題詠「この夏に思う」

洗いたいころのひだの奥の闇

◇誰しも心の中に一つや二つは人に言いたくないことや隠したい秘密があるはずだ。闇は闇のままに。

コミュニケーション密にし過ぎて疎まれる

◇親しいことは素晴らしいことだが、親しすぎるときに疎ましく感じることもある。人間関係の近さとはなかなか微妙なものだ。

線香花火あの日あの時あの人と

◇夏のまだ若かったあの日の思い出。それは淡い線香花火と結びついている。今頃あの人はどうしているのだろう・

・

多年草 一四五号

コロナ禍に猛暑と豪雨 でも生きる

◇ちっとも収束を見せないコロナ。何もかにもがコロナの影響を受けてしまう。そんな中、記録的な猛暑と思えば激

しい雨が続く。でも人間は生きていかなければならない。
免疫が切れてしまった自粛心

◇ワクチン注射も思うように受けられない中、自粛自粛で閉じこもっていると、その自粛心さえももう保たない気がする。自粛の免疫が切れそうだ。

制御不能コロナと妻に白旗だ

◇どうやらコロナは我々には制御不能ようだ。もう一つ扱いかねるものがあるとすればそれは・・・

題詠「感触」

弟は母の乳房をひとり占め

◇弟が生まれると途端にその地位を奪われてしまう。お兄ちゃんも辛い立場にあるものです。

ぬくぬくと寝床は俺を受け入れる

◇夜、寝床に入る時、いつも幸せな気持ちに包まれます。例えそれが独り寝であったとしても。

人目避け絡む指先よくしゃべる

◇こっそり絡ませた指と指。妄想はどこまでも膨らんでいく。

一〇月

ばらばらⅡ 一五号(月刊創刊号)

終い方ひとそれぞれに流儀あり

リーダーの資質ないほどやりたがる

◇本物のリーダーは周りが推す。昨今は明らかに資質に問題のありそうな御仁がやたらやりたがる。

深々と頭下げるも選挙まで

◇選挙が近づくと、候補者のお願いコールが増えるがそれも投票日まで。

題詠「角」

人生を泳ぎ渡れば角がとれ

◇人生は川に例えられる。その川が激流ならば川底の石が丸く角が取れるように人もまた丸くなるのではないだろうか。

あの角を曲がれば会社Uターン

◇今日も出勤、あの角を曲がれば会社、ついUターンをしなくなってしまう。

あの角を曲がれば我が家小走りに

◇一日の仕事は終わり家路につく。あの角を曲がればマイホーム。つい小走りになってしまう。

十一月

ばらばらⅡ 一六号

繋がらぬ電話に命託す民

◇コロナ下、ワクチン券が届いた予約をしようと電話をす

◇人生の終い方にはいろいろあると思う。それはそれなりに流儀となっていくのではないだろうか。

真摯にと枕詞で身をかわず

◇政治家は失敗すると、責任を取らず「真摯に反省をし」と言葉だけで陳謝し、時の過ぎるのを待つようだ。

中秋の月を肴に猫と飲む

◇中秋の名月を眺めつつ、コロナで一人、いや猫を相手に静かに飲む。

題詠「風」

慣れすぎたふたりの仲に木枯しが

◇慣れ過ぎたせいだろうか。いつの間にか二人の間に隙間風ならぬ木枯らしが。

家庭内なにゆえ向かい風が吹く

◇外ならわかるが、家の中に吹く冷たい向かい風。みんな私が悪いのよ。

暴風雨テルテル坊主はほっかむり

◇次から次と台風が上陸。これじゃやてるてる坊主も知らぬ顔の半兵衛を決めざるを得ません。

多年草 一四六号

総裁選表紙と目次だけ代わる

◇総裁選になりましたが、顔ぶれも政策も代わり映えしない。まるで表紙も目次まで代わり映えしない内容。

るが全く通じない。まったくなんという国なんだろう。

キングよりキングメーカーのおお目立ち

◇総裁選が始まる。立候補する候補者もたくさんいるが、その陰で様々な暗闘がある。キングメーカーとして力を誇示する政治家を見ていると嫌になる。

またひとつ卒業します感謝して

◇人生は荷を背負って坂を登るがごとしと言ったのは誰だったか。次々と荷を降ろすのは卒業と言えるかもしれない。

題詠「度」(字結び)

節度とは政治家たちの知らぬ語彙

◇謙虚とか節度とか、そうした言葉が一番似合わないのは政治家では無いだろうか。

度外れたピンクムーンが偉そうに

◇最近ピンクムーンとかやたら月が大きく見える。まるで月が夜空でふんぞりかえっているようだ。

不倫さえ度重なれば文化人

◇不倫も文化と言ったタレントがいたがさすれば不倫を重ねると文化人になるのかしら。

多年草 一四七号

新総理聴く耳もつが手はもたず

◇新総理は聞き上手と自分では言っている。しかし打つ手

を見ていると耳はあっても手は持っていないのかもしれない。

やっと減るもう大丈夫でも不安

◇二年の月日を経てやっとコロナも収束の気配。もう大丈夫とは言ってもやはりまだ不安が残る。

入試にも比例復活認めてよ

◇小選挙区制、落選しても比例で復活。何だか訳がわからん。それならいっそ試験にも比例復活を採用してほしい。

題詠「本(ブック)」

趣味は何 読書と答え漫画読む

◇趣味は何と聞かれて、「読書」と型通りに答える学生は多い。実際にはその読書は漫画が中心。

消えましたあの日巡った古本屋

◇暇なとき古本屋街をぶらつく趣味があった。久しぶりにそのコースをたどってみるともう店は閉まっている。

数行で眠りに落ちる愛読書

◇愛読書を枕元に置いてあるがいつもページを開くとわずか数行で眠りに入ってしまう。入眠本とでも言うのだろうか。

一二月

ばらばらⅡ 一七号

◇無言でコーヒーを挽く。その音は怒りを反映している。

厄年が無くなって後勝負です

◇六〇を過ぎるともう厄年がない。人生の長さを考えるとそこから本当の勝負ではないのだろうか。

いくつまで品質保証できますか

◇物には賞味期限というものがある。人にもありそうな気がする。自分の品質はいつまで保証できるのかなあ。

題詠「ばらばら」

若ければ夢の数だけ道がある

◇若者にはそれぞれに夢がある。気がつくとも年寄りとはみんな同じ夢を見るような気がする。

りんごとして色も形も皆ちがう

◇よく見るとりんごにもその色や形様々である。これはリンゴの個性と呼べるのではないだろうか。

散らかった記憶の破片かき集め

◇最近物の名前、人の名前が出てこない。何とか思い出そうといろいろ努力する。

コロナにも寿命あったに違いない

◇コロナの急激な減少は不思議である。きっとコロナにも寿命というものがあつたに違いないと考える人は多い。

よい人を演じし過ぎて鬱となる

◇世の中良い人を演じすぎるといつの間にか鬱になつてしまう事は無いだろうか。わがままに生きている人がうらやましい。

怖いのは己の中に住う鬼

◇誰しも心の中に暗闇を持っている。表現を変えれば鬼を飼っているのかもしれない。

題詠「がっかり」

親ぐらい期待しなけりやかわいそう

◇親ばかりと言われようが、せめて親位我が子に期待をかけるなければ立つ瀬がない。

ため息ひとつ別れも告げずに去った君

◇あの時深いため息ひとつついて去っていった君。あのため息の意味が今やつとわかる。

せめて親 おだて期待しあきらめる

◇子育ては褒めて育てる。どんなに期待してもいつの日か諦める。それが親業。

多年草 一四八号

怒りこめガリリガリリと豆を挽く